ロッパとか、東南アジアとか、新大陸とか云つた極めて広汎な概括的なものに終始し、そのため豊富に挿入された図の多くが、一つの部落、一つの農場というような小地域に於ける詳細な、極めて興味深いものであるにかかわらず、本文の中にその図が充分に生かされていない憾みがあり、さりとてまた世界的な視野に於て或る事象に関する分布範囲なり地域区分なりが描かれてもいないので、地域的考察が結局単なる類型化に止まつている場合が多いのは遺憾である。

しかし乍ら本書の出現は農業地理学の発展史上、まことに画期的なことと云わねばなるまい。本書の特色は、これまで合衆国の経済地理学書に屢〻見られたような、種々の生産物について夫々の世界的分布をドットマップで示しつつ、それが生産の自然的条件や世界の需給状況を順次述べて行くという、素朴な物産誌的乃至商品地理的な行き方とは異つて、農業地理学上の諸問題を一つの体系の中に位置づけて行こうとしていることであり、一つのクンデとしての農業地理学の体系化が野心的に指向されていることである。そしてあらゆる論議を、嘗てリュトゲンスその他によつて唱導された交互作用理論のマンネリズムから解放するために、すでに述べたように、例えば農民の社会的構造の面や農業の経済形態、農業景観など、能う限り多くの観点を把え、また従来のドイツ経済地理学に欠けているとされた社会的歴史的な側面を強調し、更にその他多くの類縁科学の成果を十分に取り入れることによつて、本書の内容はますます多彩なものとされている。考察・分析の視点を一つ一つ例をとつて掲げつつ、農業地理学の在り方をあらゆる方向から検討して、少くともその在りうべき骨骼だけは十二分に示し、多くの問題に対する考察の可能性を示顕したその功績は高く評価されねばなるまい。

——浮田典良——

最近の日本考古学の発掘報告書

この一年間に出された報告書の数は、前年度に倍加し、戦前にも例を見ない程の数量に達した。これ等は最近の発掘事業の報告のみではなく、従来未発表のままおかれていた調査の報告も含まれているが、とにかく考古学の研究を進めて行く上に最も重要な報告書がかくも多く出版されたことは喜ばしい。

以下それぞれの報告書をとり上げることにする。

文化財保護委員会
大湯町環状列石——秋田県鹿角郡大湯町所在——
（埋蔵文化財発掘調査報告　第二）

十和田湖からさほど遠くない秋田県鹿角郡大湯町に大きなストーンサークルらしいものがあつて、それが縄文式後期のものであるとの話を後藤守一氏からうかがつたのは昭和二二年の初めであつた。それが一体何であるかという疑問は未だにとけないが、それがどの様なものであるかということは本報告書によつて十分に知ることができる。

本書は昨年紹介した『吉胡』に次ぐ国営発掘第二号として、昭和二六、七年に調査された大湯遺蹟の報告書で、調査経過と総括とを斎藤忠氏、地学的所見を藤岡一男、佐藤久両氏、組石遺構を後藤守一氏、隣接地の発掘と同地出土遺物を八幡一郎氏、遺蹟の土壌の燐

分析を長谷部言人、渡辺直経両氏、秋田県下の類似遺蹟を武藤鉄城氏、本州の類似遺蹟を江坂輝弥氏、北海道の類似遺蹟を駒井和愛氏、わが国における石信仰を大場磐雄氏がそれぞれ分担執筆している。

本書によれば、大湯遺蹟とは鹿角盆地の東北、大湯川左岸河成段丘上の平坦面にあり、約八〇米をへだてて築かれた、ほぼ相似た二つの組石がそれである。一を野中堂遺蹟、その北西にあるものを万座遺蹟と呼んでいる。何れも外径四〇数米、幅数米の外帯と、外径約一〇米、幅二米程の内帯の二重の環状組石からなり、更に両者共に西北の内外帯の中間に列を離れて所謂日時計と呼ばれる組石が見られる。所が、内外帯は単なる環状の列石でなく、数個乃至十数個の石を一～二米の範囲に、種々の形に組合せた数十の遺構の集合であつた。その内の一四例を発掘した結果大部分はその下に径一米前後、深さ四〇～五〇糎の壙があつて、恐らく人体を屈葬したものもあろうと考えられるに至つたが、壙内の土壌分析の結果、壙外よりも燐が多く検出されたのは一例に過ぎなかつた。此の遺蹟の作られた年代は、組石の間及び周辺に縄文式後期の包含層があり、万座遺蹟に接して、其の後期の住居が営まれた事が明確になつたので、大凡この時代に構築されたものであろうとしている。後藤、駒井両氏は墓地説をとるが、特に駒井氏は北海道の例を引いてシベリヤ、蒙古との関連を論じ、これに対し大場氏はわが国の石の信仰の例を挙げて祭祀遺蹟説もすてがたいとするとともに立石遺構が縄文式前期まで遡る例のあるのを挙げて、これより新しい例より発見されていない北海道を通つて伝つたとは考えにくいと論じて居る。現在の処他に類を見ない本遺蹟のことであるからその性格については簡単な結論を望む事は不可能であるが、この様に各方面から調査された報告書の出現は斯学に志す者にとつて誠に有難いと言わねばならない。

執筆者の分担内容から見て先の吉胡の様な不統一は見られないが、なお一部には記述の重複した部分がある。更に図版、挿図については似た様な石組の個々の写真、実測図が多く現地にのぞんだことのない読者には理解に不便な点があるのではないかと思われる。大きな櫓を組んで全景写真を作られた努力を一歩進めて、部分的にまとまつた写真を撮るとか、せめて実測図だけについてでも相互の関係を示した部分図を全図の他に入れて欲しかつたと思う。（昭和二八年九月文部省文化財保護委員会刊　B5版　本文二〇〇　附録三七　英文概要一九　図版六八　定価一五〇〇円）

――坪井清足――

山口大学島田川遺跡学術調査団
小野忠凞編
島田川――周防島田川遺跡調査研究報告――

本書は周東丘陵地域を潤して周防灘に注ぐ島田川受水地域と、これに隣接する室積海岸を含めた地理的単元を調査地域として、昭和二五年より四年間にわたつて実施された第一期考古学調査の結果がまとめられたものである。調査は山口県及び文部省の援助の下に行われ、山口大学光分校の小野忠凞氏が主として担当し、従つて本書の大部分は、同氏が記述している。地域内の諸遺跡の分布を描き出す為の踏査によつて重要と認められた岡山・

天山の二遺跡に対しては、本格的な発掘調査が試みられた。熊毛郡三丘村の比高約三五米の低い台地上に位置する岡山遺跡の発掘調査は、昭和二六年三月に行われ、台地北端部で、一群の竪穴住居址を環つている壕状遺構が発見された。これ等の竪穴住居址は土師器――著者は弥生式土器としている――を出土しており、弥生式中期の構築になる壕と時期的に異るものである。壕と同時期に属する遺構は、竪穴床面下に発見された一つの小ピットだけである。

この遺跡と中村川を隔てた東の台地に天王遺跡が位置している。これは昭和二五年六月から二年間に亙つて調査され、ここでも台地南端のくびれ部に設けられた壕状遺構が発見された。この遺構の南の崖面では、前期末から中期にかけての弥生式土器を出土する竪穴群の断面が検出されている。しかしその各々の平面形及びそれらの相互関係は明かでない。更にこの北西約一五〇米を隔てた同じ台地上で、一二基の箱式棺群と、二五組の弥生式後期の甕棺群――口を合わせた壺を主としている――が調査された。前者はその主要部が花崗岩の地山を掘り込んで埋められ、後者は箱石棺の上やこれに近接した地点に浅く掘つて埋置されている。両者の中からは人骨・副葬品の類が一切検出されていない。

以上の二遺跡の他、踏査及び試掘等によつて、縄文晩期から古墳時代後期に及ぶ多数の集落遺跡が検出された。島田川流域を上・中・下の三地区に分けて見ると、縄文式時代の遺跡は概して上流域に多く、弥生式時代の遺跡は――中期のみが明かである――上・中流域に、古墳時代のそれは各地区に亙つて営まれているようである。又これを集落立地の上から見ると、縄文式時代では山麓斜面の舌状台地に、弥生式時代では台地上に、古墳時代では主として山麓線に多いという結果が得られた。

以上に挙げた調査事実中、特に注目されることは、台地上に構築された弥生式時代の壕状遺構の発見である。しかし、これと住居との関係が明かにされ得なかつたことは今後に問題を残している。又天王遺跡で発掘された多くの土器は従来よく知られていなかつた長防地方の弥生式終期の資料として重要である。諸調査に注がれた著者の努力によつてこの地域に於ける遺跡の実態は可成り明かになつた。しかし集落立地の変遷の要因に加えられた考察は、第一期調査の結果だけから結論を急ぎすぎた感があり、今後続行される調査の成果に基いてより妥当な見解を示していただきたい。なお記述が繁雑で要点がつかみにくいのは本書を通じての欠点であろう。しかし一地域内における遺跡の徹底的な調査を行い、上代住民の生活文化と生活地域を地縁的統一の相において把握して行こうとする意図は高く評価されなければならない。

（昭和二八年八月山口大学島田川遺跡学術調査団刊　B5版　本文一九一頁　附録一四頁　英文概要一四頁　図版三七）

――金関恕――

国学院大学伊場遺跡調査隊
伊場遺蹟――西遠地方に於ける低地性遺跡の研究――

浜松市の西側をその南端として形成された三方ヶ原台地の南には、遠江灘まで約四粁の幅をもつ海岸平野が展開している。この低地帯には南北にかけて数条の砂丘列が走つてお

り、北から第二条目にあたる砂丘の南麓に、主として中期以後の弥生式土器を出土する集落址が、第四条目の砂丘列の南側では、主として土師器・須恵器等を出土する集落址が発見された。この二つはそれぞれ伊場及び城山遺跡と呼ばれ、浜松市伊場遺跡保存会の援助を受けた国学院大学調査隊の手によつて、昭和二四年四月から二五年八月まで断続的に調査された。

本書はこれ等の調査報告がまとめられたもので、序章と結語を樋口清之氏が、調査経過とその成果を高柳智氏が、遺跡の地理的考察と自然遺物を中川徳治氏が、遺跡の状態と文化遺物を金子量重氏が、それぞれ担当執筆している。

今日水田下に埋没している伊場遺跡では、約二二〇平方米のトレンチが縦横に入れられ、遺物は耕土・有機土層・青色粘土層と続く層序中、主として青色粘土層土に見出されている。この発掘によつて、焼土、炭灰の散布状態から住居址と想像される遺構と、青色粘土層中に掘り込んでつくられた多数の完形土器を収容した竪穴遺構――貯蔵庫様のものであつたと想像される――等が認められた。特殊な遺物としては、算盤珠状土製品と玻璃小玉が挙げられる。土器の出土状態や層序中に入り込んだ砂層の状態等から推して、この集落はしばしば水害をうけたらしく、少量の土師器が出土していることから古墳時代の初期に廃絶したようである。

城山遺跡は伊場遺跡の西方約六〇〇米の地点にあり、同じく水田下に埋没している。この地点の住居は地表下約五〇糎の青色粘土層上に営まれたと推定される。垂木・木舞を始め木屑と思われるものの堆積と二個の礎板の発見によつて、ここでは住居址の存在が確認されたが、その構造は明かでない。この住居址における出土土器は主として土師器及び須恵器である。これに接近して青色粘土を掘り込み薄板で筒形につくられた小型の井戸が発見された。この住居址の東側の地点で出土した特殊な遺物として、青色土層を被覆する有機土上層部の富壽神宝及び墨書のある須恵器・陶器が挙げられる。出土遺物から推して、この集落が営まれた時代の上限は古墳時代前期頃で、下限は平安時代初期頃であろうと考えられる。従つて伊場集落をすてた当時の住民が城山に移つたと考えられるが、この推定は層序地形の変化等からも裏づけられる。

低地遺跡調査の常として激しい湧水の為に泥濘化したトレンチ内での遺構の検出はまことに困難であり、この両遺跡でも遺跡の実態が明かにされたとは云い難い。しかし遺跡についての説明はあまりにも簡単すぎるうらみがあり、遺物出土の状態等は図を使用して明瞭に説明して欲しい。遺物の項でふれられている図文をもつた陶器の出土状態、結語で献馬の信仰として述べられている燈器と土馬の関係等が遺跡の項で無視されていることは当を得ていない。記述の主力は遺物の報告に注がれているが、土器の分類も、主要遺物に附された解説もやや公式的で時に重要な問題が展開されている訳ではない。

従つて序章に提起された弥生式文化東漸の途次に於ける瓜郷登呂間の空白を埋めようとする研究目的は本書によつて充分達成されたとは云い難く今後に問題を残しているようである。（昭和二八年九月　浜松市伊場遺跡保存会刊　B5版　本文二六頁　英文概要四頁

新潟県教育委員会　千種（ちくさ）（新潟県文化財報告書第一考古編）図版二四）

――金関恕――

新潟県佐渡郡金沢村千種で昭和二七年四月に発見された低湿地遺蹟の報告書である。千種遺蹟は同地を流れている国府川の改修工事中に発見された為、工事につれて同年五月と七月の二回にわたり佐渡古代文化研究会と国学院大学大場磐雄氏等によつて調査が行われた。本遺蹟は佐渡ヶ島の中央を大佐渡小佐渡の二つの山地より流れ出る水を集めて西南流する国府川の河口から約四粁、国中平野の中央に位している。現地表は海抜約二米、且遺物包含層はこの面より二―三米低いので、略海面と同じ高さにある。当時の潟湖の周辺に営まれた集落であつたと考えられている。発掘された遺物はこの様な遺蹟の性質上多量に遺存する木器をはじめ、土器、骨角器、自然遺物等であつた。矢板列が溝を構成しており、極小規模な貝塚が検出されたが住居址は発見されなかつた。本遺蹟の最大の特色は裏日本には未だ例の多くない低湿地遺蹟の具体例が発見されたことで、したがつて多数の木製品を出土した事にあると言わねばならない。

本書の木製遺物の記載は、この種遺蹟の発掘に造詣深い大場氏のほか、亘理、山内両氏の樹種に関する専門的研究を載せている。これらの木製品が用途に従つて材質を選んでいる事実のほか、これらの樹種によつて復原された当時の佐渡の自然林の景観に説き及ばれているのは注目すべきものと言える。

次に我々にとつて興味深いものは小出義治氏分担の土器であつて、一六〇余個の土器の実測図を用いて記述されている。本遺蹟の土器は、各種の器形を網羅し出土状態より一時期の土師器――著者は弥生式土器としている――と考えられる。即ち一括遺物としての此の時期の土器がかくも多数に、且豊富な内容を持つて発見された事は例を見ないもので、その点から誠に重要な遺蹟であると言える。著者も之を一形式として「千種式」の名称を与えているが、その考察に於ては稍〻公式的に過ぎ、本様式の持つ意義を十分に認識して居られぬのではないかと考えられる。何れにしても本遺蹟の土器の研究は土師器を知る上に極めて重要なものであると言い得る。遺物の上で今一つ見逃し得ないものは一片ではあるが卜骨の発見であろう。これは鹿の肩胛骨を用いたもので三浦半島の弥生式（久ヶ原式）に伴つた猪の肩胛骨及び肋骨を用いた例と共に重要な遺物であると言わねばならない。

以上に挙げた執筆者の他に調査の経過を土地の佐渡古代文化研究会の本間氏、自然遺物を直良氏、地理学的考察を式氏、地史的考察を新潟大学の西田、渟田両氏が行つて居られる。以上通読した処本書は共同執筆書の通弊たる不統一の欠陥が見られ、各執筆者が夫々の個処で考察を試みているが、これに比して総括の項の貧弱な点は編輯者の一考をうながしたい。土器及び木器の図の印刷にはかなり苦心が払われていることが認められるが、他の挿図・図版には同様な配慮が欠けているのが惜しまれる。（昭和二八年一〇月　新潟県教育委員会刊　B5版本文一一二　図版二五別図二二）

――坪井清足――

柴田常恵・森貞成
日吉加瀬古墳——白山古墳・第六天古墳調査報告——

本書は昭和一二年五月に発掘された神奈川県川崎市南加瀬の二古墳の調査を録したものである。当時発掘は柴田常恵氏の指導で行われたが、報告書は森貞成氏の原稿によつたらしい。

白山古墳は日吉台の洪積台地上に築かれた前方後円墳で、全長八七米あり、前方部の低く細い型式に属する。後円部に三個、前方部に一個の埋葬があつて、そのうち後円部中央のものは木炭槨、他の三者は粘土槨と称されている。いずれも内法長七米内外、巾一米内外の普通のものであるらしいが、この種の内部構造に対する理解が発掘者に不足していたために、記述は隔靴掻痒の感があり、図も不完全で読者の疑問に答えてくれない。

所謂木炭槨の副葬品は天王日月銘四神四獣鏡・小型内行花文鏡のほか、小玉・刀剣・刀子・鏃・斧・鎌・鍬・鉋・鑿・錐・楔状鉄器等にわたつている。このうち広幅剣は注目すべき遺品であり、楔状鉄器に対する著者の見解も興味をひく。他の三粘土槨の副葬品は小鏡・玉類を主とし、鉄製利器を含むものもある。

第六天古墳は白山古墳の前方部に接して位置する円墳であつて、陪冢かと見る予想のもとに同時に調査されたが、横穴式石室を有し時代の異なることの判明したものである。石室は胴張りをもつ特異な平面形の玄室と羨道とからなり、玄室内に一個の組合式箱形石棺を安置している。石棺内には一一個の頭骨と多数の肢骨が収められ、玉類・金銅製鈴一〇・金銀六・銅釧三・刀子等が伴出した。また玄室内にも奥壁に近く置かれた刀身一二口や鉄鏃などの遺物があり、主として羨道から若干の須恵器・土師器が発見されたという。なお棺内の十個の頭骨がすべて南端に俯して置かれ、棺外の刀身が十余口もかためて置かれていたことから、著者はこれらを同時の合葬と見る可能性が強いと述べている。

本書を通覧したところ、考察の項には粘土槨出土の仿製鏡と木炭槨出土の舶載鏡との間には、「製作年代の上に殆ど懸隔を見ることは出来ない」という独断や、幅・高さともに七〇糎に満たぬ石棺内に、一〇人の遺体を同時に収容しうるとする想像など、容易に首肯しがたい所説があり、遺物実測図の幼稚さもおおいがたい。しかしそれらは、かつて本古墳の調査が当時の学界に寄与した功績を左右するものではない。松本信広氏が本書の例言で懇切に述べられているように、「系統を追うて発展して行く科学研究に於て過去の或時期に於ける業績が、未発表に終ると後続研究者は、頗る難渋を覚えるものである。」その意味で、多少の物議をかもす事は覚悟の上で、古く執筆された報告を大体その当時の形で印行することに決心されたという編者の英断に感謝したいと思う。

なお本書には南加瀬出土の秋草文壺についての小山富士夫氏の一文が巻末に附載されている。上記の古墳と直接の関係はないが注目に価する遺物である。（昭和二八年十一月　三田史学会刊　B5版　本文一四二頁　英文概要一二頁　図版二七　定価一五〇〇円）

——小林行雄——

梅原末治
肥前玉島村谷口の古墳
（佐賀県文化財調査報告書第二輯）

本書は同時に紹介する他の報告書とは異る著しい特色を備えている。たとえば本墳は筆者自ら発掘したものではなく、すでに早く密掘され、副葬品の取り出されてしまつたものである。一体考古学資料にはかかる類がかなり多く、その内容が重要であるにも拘らず、きわめて貧弱な紹介しかないために、われわれが隔靴掻痒の感を戴くことが再三でない。筆者はかねてより発掘の猥りに行うべからざることを戒めて、既出の資料の再検討を強く主張しておられるが、本書はこの点に対する筆者の実践を具示されたものとして、しかもかかる調査の一範例を示されたものとして、今日における意義は大きい。すなわち本墳の発掘は明治四十一年に当り、現状はかなり変形されている。著者は元形を復原するために発掘関係書類の再検討、聞書き、あるいはほかの学者の調査などをたんねんに集積され、これらを著者自らの実地調査に基いて、充分に批判消化し、全体を見事にまとめあげておられる。

本墳は上代末盧国とされる唐津に近い松浦潟に臨んだ地域内にあり、山丘の端を切断し、その自然の丘を利用して前方後円形の墳丘を営んだものである。その後円部に長持形石棺を収めた板石積の石室が二室相並んで存し、前方部にもまた埋葬痕がある。石室は竪穴式に属するが、天井は左右より持出して合掌形にしている点に特色があり、石棺は細部に多少の異点も認められるが、幾内に多い長持形であり、しかも床面に枕を造り出してある。副葬品のうちで注目されるのは鏡と石釧である。前者のうち三面の仿製三角縁三神三獣々帯鏡は、うちに「吾作明竟」の銘を有する特色のある類が、最近ほど近い糸島の一貫山古墳から同范鏡二面を出している点で注目されることもさることながら、この三神三獣式の仿製品が三角縁神獣鏡として比較的時代の下るものであることが、本例によつて暗示されるようである。また伴出の位至三公鏡や捩形文化された四獣鏡なども共に問題の多い鏡式である。石釧は北九州に極めて乏しく、石棺や墳丘その他にみる特色とともに古墳盛期における幾内との関係が特に深い例として筆者が指摘されているものである。

遺跡遺物に対する記述は博士の従来ものされた茫大な報告書の例に漏れず、万遺憾がなく、ほかに石枕付石棺、長持形石棺、位至三公出土古墳などの地名表を挙げておられるのもありがたい。

本墳が北九州における幾内の影響の比較的濃厚な例として、当時の大和朝廷と北九州との関係を考える上に貴重な資料となることは筆者の言の通りであるが、北九州一般の墓制はかなり違つた内容を持つてをり、その北九州墓制の全般の中にかかる畿内的特色のつよいものがいかに位置づけられるかが、今後の与えられた問題であろう。（昭和二八年三月佐賀県教育委員会刊　B5版　本文四二頁　図版一四）

――樋口隆康――

大阪府教育委員会
河内黒姫山古墳の研究
（大阪府文化財調査報告書第一輯）

本書は昭和二二年から二四年にかけて、大

阪府古文化記念物等調査委員会の事業として再度にわたつて行われた南河内郡黒山村黒姫山古墳の調査報告である。調査主任は末永雅雄氏、助手は森浩一氏であり、執筆は森氏が担当している。

この古墳は応神陵を含む古市誉田古墳群に近いが、それとは独立した位置を占め、平地に築造されたほぼ西面する前方後円墳で、全長一〇四米、前方部は後円部に比し幅・高さともにやや大である。周濠をそなえ、二段築成で、造り出しは北側のくびれ部のみにある。又、いわゆる陪冢は六基あつたと推定されている。

後円部頂上の主体部は既に破壊され尽しているので、調査は前方部頂上とくびれ部とのほぼ中間に発見された竪穴式石室、及び埴輪の配列の追迹に集中されている。又、後世における墳丘の変形も二本のトレンチにより確認された。最も注目すべき埴輪の調査により、二段にめぐらされた円筒列の上段列、後円部頂の形象埴輪の残存状態がよく明確化されている。重要な事実としては、㈠上部円筒列外の蓋形埴輪の配列。㈡上部円筒列の斜面における傾斜（地表面に対し直角に立つ傾向）。㈢上部円筒列内部を後円と前方に移る部分で楯形埴輪列で遮断していること。㈣後円部主体上の形象、埴輪の方形の配列等である。前方部の竪穴式石室の四壁は河原石積で、内法は長さ約四米、巾八十糎内外、高さ約一米、内部からは短甲二四領を主とする甲冑類、刀、鉾等の利器類が発見された。これら発見品が甲冑武器に限られること、及び遺骸埋葬が行われなかつたことが殆ど確実であることとは最も注意すべき点である。

このように、重要な事実を多数に含んでいるだけに、又、整理の困難な鉄製品の大量出土という条件はあるが、やはりここで報告技術の今一段の努力をお願いせねばならない。考古学の報告書は一般に読みにくいものであるが、その克服のためには、図版と写真の自由な駆使と、これと一体になつた記述が要求されるであろう。この報告書における努力は充分認めねばならぬとしても、なお不備の点が多く認められる。例えば、これだけの大規模な調査でありながら、埴輪配列の実体が読者に迫つてくることが少く、又、事実の点でもやや明確を欠く点がある。更に、遺物の出土状態についても、更にくわしくて明瞭な配置図が望まれるのである。又、記述一般についても今一そうの努力を望みたいと思う。

後論で述べられている前方部石室の遺物埋納用としての性格づけは大体首肯せられる。又、古墳の年代についても大体妥当であるが、この古墳の被葬者は丹比氏の祖、色鳴宿禰と考えるについては、今一度、考古学と文献との結びつけの問題をよく考慮する必要があるのではなかろうか。この結びつけの問題は決して簡単なものではないのである。（昭和二八年三月　大阪府教育委員会刊　B5版本文五八頁　図版二〇頁）

——藤沢長治——

森浩一・宮川徒著

堺市百舌鳥赤畑町カトンボ山古墳の研究

（古代学叢刊　第一冊）

この古墳は百舌鳥古墳群内の御廟山と呼ばれる前方後円墳の陪冢と推定される円墳であり、昭和二四年二月、土取り作業で破壊されつつあるものを、古代学研究会員が中心とな

つて調査された。

従つて、破壊の度が著しく、主体部についても、その一端が辛うじて確認、発掘されたに止まる。主体は一種の簡略化された粘土槨と言われ、残存部においては、その内部から遺物は発見されず、外部から少数の鉄製品が発見された。

遺物としては鏡二面の他、滑石製品及び同模造品、利器を主とする鉄製品であるが、最も注意すべきは滑石製品と同模造品である。これは子持勾玉四個をはじめとし、多数の勾玉・刀子・臼玉の他、斧頭・鎌・鏃形・双孔円板がある。

この古墳において最も問題となるのはその陪冢としての性格であつて、これは本書の考察において遺物（主として滑石製品と同模造品）と遺跡（主体部）との関連から取り上げられている。ここにおいて、遺物には祭祀的性格の強いこと、主体部が木板と考えられる簡単な設備であつたことから、或は遺骸埋葬が行われなかつたのではないかという重要な推定が下されている。しかし、祭祀的性格というものが、果して古墳一般とどのように関連するかが大きな問題であり、又、この推定を裏附けるために豊富な引例が行われているが、最も決定的とも云うべきこの古墳の主体部が破壊著しく、やや明確を欠くのであるから、この問題の展開は将来に残されていると考えた方が妥当であろう。

多数に発見された滑石製の勾玉と刀子、特に後者については詳細な型式分類が行われているが、この分類が何を意味し、又、これからどのようなことを引き出しうるかが、私としては特に知りたいと思う。又、これらの遺物の写真と実測図との関係をもつと明瞭にしていただきたいと考えるし、残存部出土の遺物の配置の説明についても、もつとわかり易い図が欲しかつたと思う。

いろいろと妄評を行つたが、現在急速に破壊されて行く多くの遺跡を考え、これを調査して、資料として発表して行くことが、如何に困難な事業であるかを思う時、古代史研究会の人々の努力に大きな敬意を表すると共に、今後の活躍を期待したいと思う。（昭和二八年四月　古代学研究会刊　B5版　本文四五頁　図版一五頁　定価四〇〇円）

——藤沢長治——

一〇二　後藤守一・斎藤忠著　静岡賤機山古墳

この古墳はかの登呂遺跡の調査と関連して同遺跡の周辺調査の一つとして採上げられたもので、昭和二十四年三月に一週間を費して発掘された。調査には後藤守一、斎藤忠両氏が当られ、報告書も両氏の分担執筆であるが、殆んど大部分後藤氏が担当されている。山丘上に営まれた推定径三十二米、高さ七米の円墳で主体の横穴式石室は南向、長さ一二・四米を測る。所謂両袖式の石室で玄室前寄りに全長二・四米の家形石棺を蔵し、これが明和年間に盗掘されたことが記録に出ていて、これが又調査の動機ともなつたらしい。石室は石組が粗雑で危険を伴う為完全な除土は出来なかつたようであるが、石棺内部及び外側からは冠帽金具、歩揺等の服飾品、玄室床面では刀剣、鉄鏃、馬具、挂甲、須恵器等豊富な副葬品を出し、この種古墳としては注目すべき貴重な資料である。ただ、石棺内は既掘のため甚しく攪乱されていたとはいえ、他の出土品は殆んどが埋葬時の原位置を保つていたと述べられているにも拘らず、それを

示す図を欠き、記述によつて漸くその大凡その位置を知ることしか出来ないのは、遺物のすばらしいにつけ非常に残念に感じるところである。著者は一個の石棺の蔵置を以てこの古墳の埋葬者を一人と断定しておられるが、玄室奥に残された石棺の長さに略等しい空間なり、この部分から出土した大小二対の金環、或は玄室の奥と前とでは土器に若干の違が認められること等は寧ろここにも埋葬が行われたのではないかとの疑を抱かせる。行文にあらわれる著者の豊富な学識には敬服するものであるが、発掘報告書が先づ忠実な遺跡遺物の記録であつてこそ、利用者が共通のデータの上にそれぞれの解釈を進めてゆくことが出来ることを今更乍ら痛感する次第である。

猶古墳の年代について著者は後期古墳時代の前半期の後半、即ち六世紀後半という推定を下しておられるが、その根拠としては、家形石棺の形が整つていて中期の舟形石棺の趣を具えていること、副葬品に鏡があり、刀装具ことに鍔において金銅装のものがまだ現れておらず、倒卵形鍔の発達が未完成であること、又土器に新しい様式を認めないことを以て後期前半の様相を示すものとし、金環の伴出によつてその年代を若干下げるべきものと説明している。併し六世紀後半という推定年代の当否は別として、その証明に用いられた資料の中、家形石棺が年代の溯るものであるという説は、縄掛突起の形態その他蓋の構造からみて承服し難いし、両端の巾の差、而も極く僅かな違いを以て舟形石棺の趣をもつたものとする考えも、この程度の両端部の差は普通家形石棺の多くについても認められる以上、何等古式とする材料にはならないのではあるまいか。又土器の形式が第二様式、即ち著者の云う飛鳥色をもつていないことは、飛鳥色なるものが古墳時代の須恵器の中でもごく末期の現象であるから、これを以て年代を限定する重要な根拠とはなし難い。猶この報告書に関しては既に考古学雑誌第三十九巻一号に増田精一氏が紹介しておられるが報告者が不明品とした金銅製品が壺鐙であることは氏と同意見である。（昭和二八年三月　静岡市教育委員会刊　B5版　本文一〇三頁　図版一五）

——川端真治——

金山古墳および大鼓古墳の調査

（大阪府文化財調査報告書第二輯）

金山大鼓両古墳の調査は、夫々昭和二一・二四年に、京大考古学教室員の手で行われた。共に偶然の発見によるものであるが、報告書が一冊にまとめて出版されたのは単なる便宜の措置ではない。どちらの古墳からも合葬に関する重要な事実が発見され、共通の問題を含んでいるからである。従つて本書には、金山古墳を小林行雄氏が、大鼓古墳を楢崎彰一氏が分担して、調査事実を記載している他、横穴式石室における合葬についての小林氏の考察がつけ加えられてをり、別に島五郎・山崎秀治両氏の大鼓古墳出土人骨歯牙に関する報告が、巻末に附載されている。この様な報告書のまとめ方は、偶然のチャンスを巧みにとらえて、自己の研究計画を推し進めて行こうとする態度から発したものであつて、自由に対象を撰択して計画的な調査を行うことの困難な現在においては、着実な方法と言つてよかろう。

本書の内容を簡単に紹介すると、まず金山

古墳（南河内郡中村）は、大小二つの円丘を連結して、共通の周濠をめぐらす双墓型式の古墳である。調査の主眼点となつた横穴式石室は小丘に属し、くびれ部に向つて開口している。既に徹底的に盗掘されているこの石室が注意をひいたのは、その玄室と羨道とに各一個の家型石棺が置かれているからである。両棺は相似た形をしてはいるが、細部に年代差を示すと考えられる若干の差異が認められ、羨道の棺が後に追葬されたものであることが知られた。

次に大鍛古墳（中河内郡石切町）における調査の最大の収獲は、横穴式石室における多人数合葬の実態を明かにしたことである。その石室は既に封土と天井部を完全に失なつているが、玄室の奥に二個の小さな粗製組合石棺があつて、夫々内に五体と二体の人骨が残つてをり、別に棺外からも四体分の人骨が発見された。この二つの石棺は、その下底部の精査によつて、後の追葬の際に設置されたものであることが知られた。遺物は貧弱であるが、多人数を合葬しているにもかかわらず土器の上に著しい形式差が見られないこと、後の追葬に当つて先葬者の副葬品を整理した形迹のあることは注意をひく。人骨の性別は、男六体、女四体、少年一体であつて、内八体が男女を組合せて葬つたとも考えられる状態にあるので、夫妻ではないかと推測されている。なお歯牙のうちに黒歯が見られることも性質不明ながら興味をひく事実である。

考察の項は、横穴式石室における合葬の諸形態を分析したもので、特に明確な結論は出されていないが、多人数合葬の場合に、追葬者の遺骸を容れる空所を得るため、先葬者の遺骨・副葬品を整理する風習の存在を指摘して、大鍛古墳の二石棺は、追葬に当つて先葬者の遺骨を収容するために設置されたのではないかとの推定を下しているのは卓見である。前に紹介した、加瀬第六天古墳の合葬についても、この見地から再検討する必要があると思はれる。（昭和二八年三月　大阪府教育委員会刊　B5版　本文六五頁　図版一八）

――横山浩一――

一〇四　佐良山古墳群の研究　第一冊

（岡山大学人類学考古学業績第一冊）

本書はこれまで紹介して来た数篇の古墳調査報告書とは、全く質を異にしたものである。本書を理解するには、考古学を単なる古物の学から歴史学の一部門にまで引き上げようとする、調査者の強い意図を知らなければならない。本書が個々の古墳を対象とせず、一つの古墳群を全体として取上げるのも、またかかる意図にもとづいているのである。古墳群調査の必要は研究者の誰もが痛感するところであるが、今日なおそれが成就された例はきわめて少い。津山市民の委嘱にこたえ、この困難な事業に一歩を踏み出した、中島壽雄・近藤義郎氏等の高い問題意識とたくましい実践力に深い敬意を表したい。

佐良山盆地は津山市の南西にある細長い谷である。ここに群在する二百近い後期古墳の一つ一つについて、詳細な現状記録と分布図が本書の前半に掲載され、そのうち四基の古墳について行つた発掘の報告が後半に収められている。発掘を実施した古墳が如何なる観

点から撰択されたかは明記されていないが、横穴式石室を主体としたやや時代の遡る帆立貝式古墳、陶棺を細長い石室に収めた比較的新しい時期の古墳二基、高い丘の上に造られ箱式棺三つを併葬する時代不明の古墳と、一応各種のものが網羅されている。本書は、今後の調査の進行に伴い続冊の発表を予定しているので、調査事実についての考察を省略しているが、分布報告の前後に若干の考察が附加されている。前者は、作州に弥生式前期の遺跡が少ないことについて述べたものであるが、遺跡の発見されていないことを、本来少なかつたことと同一視して、やや結論を急ぎすぎた様である。後者は問題の所在と題し、末期群集墳の急激な発生を、大化前代の共同体の解体に伴う、家父長的大家族の成立によつて説明する卓見を述べている。その論証は日本古代史全体の見通しの上に進められてをり、考古学的事実から当時の政治的社会の動向を見きわめようとする態度は、旧式の考古学を清算したものと言えよう。しかし、問題意識が高ければ高いだけ、個々の調査事実とのギャップは大きい。漸く問題の一端をさぐり当てたばかりの本調査が、今後どの様に展開されて行くか、続巻の発行が期待される。（昭和二七年三月　B5版　本文一一四頁英文概要五頁　図版一二）

なお同じく古墳群の調査報告と題するものに、直木孝次郎・藤原光輝両氏の滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告（大阪市大文学部歴史学教室紀要）があるが、取扱われた古墳群が極めて小単位のものである上、内容も発掘を行つた三基の古墳の報告を主としているので、佐良山の報告と同列に扱うことは出来ない。（昭和二八年七月　大阪市大歴史学教室刊　B5版本文五二頁　図版一四）

――横山浩一――

これらの最近の報告書類を通観するとき、特に古墳発掘報告を内容とするものが半数以上を占めていることは、学界における新らしい動向として注目される。これは戦後計画的な古墳の発掘が盛んに行われ出したという事情にもよること乍ら、遺跡・遺物の紹介を主とする古墳の報告書が、かなり安易な形でまとめられることにも関係があると見られる点で、かならずしも歓迎すべき傾向とはいいえないものがある。客観的な事実の報告の速に公表されることはもとより望ましいが、報告技術の一定の水準は堅持されるべきであり、その調査がいかなる問題の解明に役立つたかを、報告書の上に表すことによつて、より水準を高めることが望まれる。一方古墳以外の遺跡を取り上げた報告書においても、調査の計画性が大いに留意せられるようになつてきた傾向は認められるが、なおそれによつて研究上に新しい局面を拓き得たものは乏しい観がある。集落址その他の調査は、特に遺跡の実際に即して、種々の問題が追及されねばならないので、発掘の成功した報告のみを望むことは出来ないが、一層の努力が必要であろう。